

説教「三対四の事実と不真実」

イザヤ五三・六〇八

ルカ 二三・一〜五、一三〜四

牧師 森田恭一郎

この夏、順に使徒信条に添って御言葉を味わっています。使徒信条、冊子に載っています。教会が信じる内容としてこの二千年間、受け継いできたものです。私たちの教会も代々の聖徒と共に使徒信条を告白し同意しています。

今日の主題は二段落目の「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」です。

ポンテオ・ピラト、これは人の名前です。彼はシリア州ユダヤ地方のローマ帝国の総督でした。紀元二六〇三六年、その務めにありました。今風に言えば地方の知事みたいなもので、その地方での事件の裁判官の任務もありました。

使徒信条に彼の名前があることで、イエス・キリストは、神話に出てくる、作り話の登場人物というのではなく、この世界史に登場した歴史上の存在であることが明らかになります。キリスト教の神は、歴史に現れた、それ故、現在の神であると言える。神様は本当にいるのですかと問われるなら、歴史に現れた主イエス・キリストを見れば分かる、主イエスが父なる神を指し示し、主イエスご自身が神の御子である。だから神はおられると答えることが出来ます。

さて、今日の説教題の「三対四」の三は、ピラトは三度目に言った(ルカ二三・二三)の三です。

この裁判の裁判官であるピラトが言った内容は

「一体、どんな悪事を働いたと言うのか。この男(主イエス)には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった」。それでは二度目は「私はあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男(主イエス)には何も見つからなかった」(同一四節)。そして一度目は「私はこの男(主イエス)に何の罪も見出せない」(同四節)。「無罪だ」と言っている訳です。

それに対してここに集まった全会衆は一度目に「この男(主イエス)は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い張った(同五節)。

二度目は、しかし人々は一斉に「その男を殺せ、バルバを釈放しろ」と叫んだ(同一八節)。三度目は、しかし人々は「十字架につける、十字架につける」と叫び続けた(同二二節)。続けて四度目がある。ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声は益々強くなった(同二三節)。

ピラトは裁判官ですから法に基づいて、決めることが出来る権限を持っていたのですから「罪は犯していないから無罪だ」と判決を下すことが出来た。しかし、そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した(同二四節)。無罪判決にしたら暴動が起きかねないと判断してしまいました。四対四にして、真理の判決を下す事が出来た、いや、そうしなければいけなかったのに、真理を曲げたのでした。結局、三対四のまま、主イエスの罪を犯していないという事実を、人々の不真実を前にピラトは葬り去ってしまいました。冤罪と言いま

す。無実なのに罪をかぶせてしまう冤罪です。これは不条理です。しかもピラトは、主イエスが罪を犯したのだ、と勘違いして有罪判決を下したのではない。これも冤罪事件で不条理ですが、ピラトは、無罪だと判断していたのに有罪判決を下した。意図的な冤罪事件、悪質な不条理です。

主イエスはこの意図的な冤罪の判決によって、十字架刑の死刑執行となりました。主イエスの死は、例えば老衰による自然死ではなく、病死でもなく、たまたま遭遇してしまった事故死でもない。ローマ帝国という異邦人の国家権力による刑罰の死でした。ここから二つ確認することがあります。一つ目は、刑罰ですから罪を負う死であつたということです。イザヤ書の言葉を味わいましょう。私たちは羊の群れ。道を誤り、夫々の方角に向かつて行つた。その私たちの罪をすべて、主は彼に負わせられた(イザヤ五三・六)。神は苦難の僕(主イエス・キリスト)に全ての罪を負わせられた。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた(同八節)。主イエスは、裁きを受けて罪を負う刑罰の死、罰を担う死を遂げられました。

二つ目は、全ての人の罪を負いました。イザヤ書続けて、彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか。わたしの民の背きの故に、彼が神の手にかかり、命ある者の地から絶たれたことを(同八節)。

彼の時代の、私の民、とあります。イザヤ書は紀元前六世紀の文章ですから、その時代のイスラエルの民、後のユダヤ人を指しています。主イエス

の時代に読めば、その時代の人たち、そして今、私たちが読めば、私たちの時代の私たちの背きを負って下さった、と受けとめられます。

併せて考えますと、主イエスを裁判に訴え「十字架につける」とあくまで叫び続けたのはユダヤ人でしたが、その判決を下したのは異邦人ピラトでした。だから主イエス・キリストを殺したのはユダヤ人だ、と一方的に主張するのは誤りです。例えば、ナチス・ドイツがユダヤ人を迫害しましたが、ユダヤ人たちがキリストを殺したことが迫害の理由の一つです。でもそれを言うなら、主イエスを十字架につけた責任は、ユダヤ人にも異邦人にもみんなにある訳です。

そうやって主イエス・キリストは、自分の罪はないのに、時代を貫き全ての人たちの罪を代わりに背負い、罰を受けたのです。

主イエスから見れば、冤罪を着せられ、自分のせいではないのに、十字架につけられるなどというのは、何という不条理でしょうか。でも主イエスは裁判の過程で「これは不条理だ」とひと言も異議を唱えるようなことは為さありませんでした。またお前たちの罪代わりに負ってやるんだぞ、と上から目線で私たちを見下すこともありません。むしろイザヤ書にある通り、苦役を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかった。屠り場に退かれる小羊のように、毛を刈る者の前に物を言わない羊のように、彼は口を開かなかった(同七節)。ひと言も文句を口にしません。

苦難を課せられる苦難の僕の姿は、主イエスご自

身にとって神様の御心に添うものだと思われ受けとめられました。そこに神の御子としての使命感と深い深い喜びがありました。彼は自らの苦しみの実りを見、それを知って満足する。私の僕は、多くの人が正しい者とされるために、彼らの罪を自ら負った(同一二節)。そうなんです。主イエスが罪を私たちの代わりに負って下さったが故に、もう私たちは罰せられることはありません。ポンテオ・ピラトの下に苦しみを受け、十字架につけられた主イエスのお姿を思う度に、私たちは感謝と喜びを心に味わいます。